

工陵

小山高専だより

祝！通刊 200号



工陵祭前夜祭～スカイランタン



秋の訪れ



祝！高専ロボコン全国大会特別賞受賞、エキシビション出場

Vol. 21 2025.11

目次

校長挨拶

赴任してから半年たって	2
第59回 工陵祭	3
アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト2025 関東甲信越地区大会	4
第59回 工陵祭 ホームカミングデイ	4
全国高等専門学校プログラミングコンテスト	5
海外研修旅行	6
高専大会	6
創立60周年記念事業	7
学生会ニュース、学寮ニュース	8



<https://www.oyama-ct.ac.jp/> 旧小山高専だより通刊No.200
※従来の小山高専Quarterlyから工陵・小山高専だより - に変更しました。



赴任してから半年たって

校長 鶴見 智

今年の夏は暑かったです。夏（6～8月）の平均気温は観測史上最高を記録しました。40℃以上の地点数の積算（30地点）と、猛暑日の地点数の積算（9,385地点）も歴代最多になりました。つまりこの夏は日本のどこにいても猛暑だったということです。そんな暑さも10月になって落ち着き、最近の朝夕は冬コートが必要なほど寒くなりました。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」といいますが、季節についても同じです。

私が小山高専に赴任して半年がたちました。前期後期の球技大会、工陵祭、マレーシア研修旅行、さまざまな行事を通して、学生の皆さん元気な姿を見ることができました。特に、工陵祭前夜祭のスカイランタン（初の試み）、本祭の花火は忘れられません。また、今年は創立60周年の節目の年で、市長他をお招きして記念植樹式を行いました。他に記念授業（オープンエンジニアリングフェア）、記念講演会も催されました。このような節目の年に校長として小山高専にいることを光栄に思います。

さて毎年10月はノーベル賞の発表の季節です。うれしいことに今年は日本から2人受賞者が出了ました。北川進京都大学特別教授がノーベル化学賞を、大阪大学坂口志文特別栄誉教授がノーベル生理学・医学賞を受賞しました。ここでは研究内容には触れませんが、北川進教授が述べていることに興味をひかれました。彼は最初の日本人ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士の著書の中に書かれていた中国思想家莊子の「無用の用」を座右の銘にしていたと話していました。「役に立たないって言われているものの方が案外チャレンジングで面白いんじゃないかな」とね（『毎日新聞』令和7年10月10日朝刊）実は私も物理学を学んでいた頃、湯川秀樹博士の著書はよく読み、そこで知った老子・莊子の思想の奥深さに興味を持った経験があります。ひねくれているところは北川教授と同じだったかもしれません、一番の違いは批判されようがやり続けることをしなかったことです。よく直感が大事だと言われますが、それを本物にするにはやり続ける力がもっと大事です。昔、ノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈博士（今年なんと100歳）の講演を聞いたとき、あきらめず実験をつづける中でトンネルダイオードを発見したと話されていたことを思い出しました。日頃「チャレンジ」しようと学生の皆さんに言っていますが、それに加え「やり続ける力」「やり抜く力」を身につけてほしいと思います。



小山高専創立60周年記念植樹式で挨拶する鶴見校長

第59回

工陵祭



私たち小山高専生にとって工陵祭というものは、大切な経験であり、成長の場でもあります。今年の工陵祭は、特にUNISONというテーマで学生と先生と私たちの協力というところに力を入れてきて、思い出深いものとなりました。

まず、準備段階から多くの仲間と共に過ごした時間が印象的でした。委員会のメンバーはそれぞれの役割を持ち、アイデアを出し合いながら、少しづつ形にしていきました。初めは不安もありましたが、互いに支え合うことで、チームワークが深まりました。問題が発生したときも、皆で解決策を考え、協力し合う姿勢が何よりも心強かったです。

当日は、緊張感と期待感が入り混じった瞬間でした。来場者の笑顔や、楽しんでいる姿を見ることができ、これまでの努力が報われたと実感しました。特に、各企画が工夫を凝らした出し物や展示が多く、来場者からの反応も上々でした。私たち学生の努力が形となり、多くの方々に喜んでもらえたことが一番の喜びでした。

第59回工陵祭実行委員長
建築学科4年 本澤 暖揮

また、工陵祭を通じて、学校全体の絆が強まったと感じています。花火が毎年打ち上げられるのも地域の方々や花火師様の協力あってこそです。このようなつながりを感じられるのも、文化祭の醍醐味だと思います。また、このつながりに感謝を忘れてはいけないと感じました。

振り返ると、様々な困難もありました。準備が進む中で、思い通りにいかないことも多々ありました。それを乗り越えることで成長できたと実感しています。委員長としての責任は大きかったですが、その分、多くのことを学び、成長する機会を得られたことに感謝しています。

最後に、工陵祭を成功させることができたのは、全ての参加者の協力と努力のおかげです。この経験を通じて、仲間たちとの絆が深まり、私自身も大きく成長することができました。今後もこの思い出を大切にし、次の挑戦へとつなげていきたいと思います。工陵祭に関わった全ての方々に、心から感謝しています。ありがとうございました。

アイデア対決・全国高等専門学校 ロボットコンテスト 関東甲信越地区大会 2025

A
チーム

魅せきった地区大会 !!

電気電子創造工学科 3年 大貫 花鈴

今年の競技は、ロボットが段ボール箱でゲートを作り、そのゲートを「人が乗った台車」とともにくぐる、という内容でした。「人が競技フィールドに入る」と聞いたとき、思わずガッツポーズをしました。私は「人とロボットのつながり」に憧れがありました。「みんなを笑顔にする・一緒に働くたら楽しいロボット」を目指し、チームで話し合いを重ねました。

プロジェクト名は「レッサー☆はぐ太郎」です。はぐ太郎は、わんぱくでちょっとおっちょこちよいなレッサーパンダの男の子です。伸びる腕で箱を運んだり、人をぎゅっと抱きしめたまま移動したりできます！

操縦者は4年電気電子創造工学科の箱守陽介先輩、台車への搭乗者は3年電気電子創造工学科の藤田遙奈さんが担当しました。メンバーやピットの揺るぎない整備のおかげで、メカ的な不調は発生せず、私たちの推しポイント「威嚇ポーズ&ハグ」を見せることができました。準決勝では敗れてしまい、全国大会への出場は叶いませんでした。しかし！なんと！本戦とは別枠ですがエキシビションの特別招待をいただきました！小山高専としては17年ぶりの出場になります。嬉しいです！せっかくいただいた貴重な機会なので、完成度をさらに高め、全国の舞台で披露してきます。

支えてくださった先生方、保護者の方々、会場や配信で応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。プロジェクトメンバー同、最後までやりります。



※詳細記事は7ページに

B
チーム

高専ロボコン2025地区大会に
参加して

電気電子創造工学科 2年 大槌 友基

今年の競技課題は、発表当初から「難しすぎる」という印象でした。バイロン運び、箱積み、人との協調動作など、全体を通してロボットの基礎技術力が極めて高く問われる内容でした。

この難題に挑むため、私たちのチームは安定性、堅牢性をコンセプトに、オヤマシュラの開発に着手しました。しかし、チーム全員、そして私も高専ロボコン初出場。皆がゼロからのスタートで、当初はチーム内の連携に苦労しました。私がこの状況で最も重視したのは、リーダーの立場のあり方です。リーダーは、上に立って指示を出すのではなく、皆にお願いし動いてもらうという、ある意味下に立つ役目だと意識しました。上から目線で提案しても、心からの協力なしには目標は達成できません。私は、「皆をお願いしているだけ」という自覚を常に持ち、どうすれば全員が納得し主体的に動いてくれるかを考え続けました。この意識がチームに浸透した結果、全員が一つにまとまり、ロボットを無事完成させることができました。

そして迎えた大会本番。私たちのマシンは、毎試合何のトラブルもなく安定したパフォーマンスを發揮し、ついに優勝を掴み取ることができました。この優勝は、メンバー全員で掴み取った誇りです。

ここまで私たちを応援し、支えてくださった方々、企業の皆様や学生、教職員、保護者の皆様、そして全ての仲間に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。





第36回
松江大会

競技部門チーム

電気電子創造工学科 3年 鈴木 真

今回、私たちは「工。－縁結びの誘導について－」という競技部門の問題に挑みました。問題の内容としては、同じ数が2つずつランダムに配置されている正方形のマスに対して操作を行い、同じ数同士を隣接させることを目指すいわゆるパズルゲームで、パズルをどれだけ少ない操作でどれだけ揃えられたかを競う競技です。今回のプログラミングコンテストは島根県での開催ということで、「縁結び」にちなんでこの問題が考案されたそうです。まずこの問題を解くにあたって、パズルのビジュアライザを作成しました。これによって、パソコン上でパズルを動かして考えることができ、解法を考えやすくなりました。また用いた解法については、確実性を重視したものを探用していました

のですが、その解法だと操作回数が多くなってしまうので、ビームサーチと呼ばれるアルゴリズムを用いて解法を設計することを試みました。しかし、本番では確実性を重視した解法しか実行することができず、予選敗退、敗者復活戦もギリギリ敗退と悔しい結果になってしまいました。今回の大会は悔しい結果に終わってしまいましたが、実際に現地まで行って競技に参加する中で様々な経験をすることができました。今回大会に参加するにあたって、ご協力いただいた先生方や先輩方、そしてチームメイトには本当に感謝しています。この大会での学びを次につなげていけるように、これからも頑張っていきたいです。

全体感想

指導教員 電気電子創造工学科 小林 康浩

由部門については、予選通過の難易度が年々上がってきている印象です。着想が重要ですが、そのアイデアをいかに具現化し、実際に使用してもらい、評価を得ているかまでが求められています。

総合的技術力の向上に加えて、低学年への技術継承など課題がありますが学生とともに今後の発展へつなげていきたいと思っています。



海外研修旅行

本年度も海外研修旅行として3年生189名でマレーシアを訪問しました。9月14日(日)～19日(金)の4泊6日という短い期間でしたが、現地高校との交流、B&S、企業訪問、カンボン体験など、様々なことを経験してきました。いずれも、楽しそうに参加したり、真剣に話を聞いたりしていましたが、特に、各グループが現地大学生とクアラルンプール市内散策を行うB&Sでは、ホテルを出発する際にはお互い初対面で緊張している様子でしたが、数時間後ホテルに戻ってくる頃にはすっかり打ち解けて別れを惜しむ姿が多く見られました。



2025 マレーシア海外研修旅行

国際主事補 日下田 淳

初めて海外へ行く学生も多く、出発当日までは不安な顔も見られましたが、帰りの飛行機やバスの中では、楽しかったと満足した顔に変わっていました。学生の皆様は、この経験を今後に活かしてください！

また、本年度も全員が無事に帰国できたことは、3年生の保護者の皆様の多大なる協力、本校関係教職員と現地スタッフを含めた旅行業者の協力体制があってのことです。関係された皆様にお礼申し上げますとともに、次年度以降の研修旅行につきましても、引き続きご協力賜りますようお願い申し上げます。

高専大会

全国大会に3種目で出場 さらなる高みへ

卓球部顧問 一般科 佐藤 悠樹

令和7年6月、新潟県長岡市で開催された関東信越地区高専大会卓球競技において、本校卓球部は男子シングルス・男子ダブルス・女子団体の3種目で優勝を果たし、全国大会への出場権を獲得しました。男子種目は十数年ぶりの快挙であり、個々の技術向上に加え、県内外の大学との練習試合など、実戦的な経験を積み重ねた1年間の成果が発揮された大会となりました。女子団体も平成31年度以来の優勝を遂げ、部全体とし





小山工業高等専門学校 創立60周年記念事業

■ ホームカミングデイ～懐かしの学生実験～

今年で小山高専も60周年を迎え、これまでに9,512人の卒業生と601人の修了生を輩出してきました。そんな節目の年である今年の第59回工陵祭にて60周年記念事業の特別企画と致しまして「ホームカミングデイ」を実施致しました。企画として、本校OB、OGの皆様が、楽しくも苦しくも高専生活で体験してきたであろう「学生実験」を体現した「懐かしの学生実験」を企画致しました。各学科の特徴的な実験装置や機器の

電気電子創造工学科 床井 良徳

展示や操作体験、高専ジャージ、各種ロボットコンテストで近年活躍したロボットの展示など懐かしさと今の高専を感じられる内容と致しました。ジャージの色の人気ランキングを決めるキング・オブ・ジャージ2025では、オレンジ色が一番人気でした。2日間で84名の卒業生の方に記名頂き、過去の良き思い出を振り返りつつ、変わりゆく小山高専の様子を肌で感じて頂けたのではないかと感じております。



■ 60周年記念授業 オープンエンジニアリングフェア

11月6日（木）に、「Co-Creative Futures! 共に創るミライ！」というテーマのもと、本校創設60周年を記念する「60周年記念授業 オープンエンジニアリングフェア」を開催しました。学年縦断・学科横断でのPBLやインターンシップの成果発表会、外部講師を招いての講演・ワークショップを行いました。また、本企画は本校におけるSTEAM教育、アントレプレナーシップ教育の一環でもあります。創設60周年という節目に、通常は参加できない他学年の活動や、様々な外部講師による特別授業をきっかけとして、改めて学生の皆さんには本校で学ぶことの意義や自分たちの未来

教務主事補 関根 健雄

について考える機会となってほしいと思います。（当日の詳しいスケジュール、講師紹介、実施内容については本校ホームページをご覧ください）



■ 60周年記念植樹



令和7年6月24日（火）小山高専創立60周年記念植樹式を挙行しサンシュユの植樹を行いました。

秋になりサンシュユは小さな赤い実をつけ、順調に成長しています。

小山工業高等専門学校創立60周年記念事業は、皆様から頂いた小山工業高等専門学校創立60周年記念事業募金で実施しています。これまでにお寄せいただいたご支援に感謝申し上げるとともに、引き続きあたたかいご支援をお願い申し上げます。

■ 小山工業高等専門学校 創立60周年記念事業について

[https://www.oyama-ct.ac.jp/
chiiki/ouenkikin/oyama60th/](https://www.oyama-ct.ac.jp/chiiki/ouenkikin/oyama60th/)





学生会ニュース
学生会執行部 広報局
物質工学科3年 柳井 優初

皆様こんにちは。学生会執行部広報局です。
木々の葉が赤や黄に色づき、冷たい風に冬の訪れを感じる季節となりました。

今年度は例年の球技大会を「体育祭」として開催し、新たにリレー競技も実施されました。クラスが団結し、懸命に走る姿や声援が響くグラウンドは大いに盛り上がりを見せました。

また、工陵祭も多くの方で賑わい、学生の活気あふれる発表や企画が印象的でした。準備や運営に尽力された皆様に感謝申し上げます。

これからは期末試験を迎える時期となります。体調管理に十分注意し、良い形で今年度を締めくくりましょう。

学生会執行部も、皆様の一助となれるよう引き続き努めてまいります。



学寮写真



寮祭



寮生ボランティア



寮祭



令和7年度後期寮長
電気電子創造工学科4年
村田 翔悟

令和7年度後期寮長を務めさせていただいております電気電子創造工学科4年の村田翔悟です。秋風が心地よく頬をなで、木々が少しずつ色づき始める季節となりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

青嵐寮では後期に入り、学業や研究、就職活動などそれぞれが新たな目標に向けて励む日々が続いているです。

先日には、恒例の寮生バーベキューが行われ、学年の垣根を越えた交流の場となりました。これまで運営側として企画や準備に携わってきましたが、今年は一歩引いた立場から参加し、後輩たちが主体となって進行する様子を見守ることができました。新しい世代の頼もしを感じるとともに、自分たちも世代交代の時期を迎えたのだと実感し、少し感慨深い気持ちになりました。僕自身も、寮生一人ひとりの頑張りに刺激を受けながら、寮長としてより良い生活環境づくりに努めていきたいと思います。このように充実した寮生活を送ることができているのは、日頃からご支援くださる皆さまのおかげです。

今後ともどうぞ青嵐寮をよろしくお願ひいたします。

独立行政法人 国立高等専門学校機構

小山工業高等専門学校

〒323-0806 栃木県小山市大字中久喜771 TEL.0285-20-2100

編集：小山高専広報戦略室 発行：2025.11